



【巻頭言】

「学会の活性化をめざして」

エレクトロニクスソサイエティ副会長（研究技術担当）

大橋 弘美（NTT エレクトロニクス）



2015年新春を迎え、お慶び申し上げます。

昨年6月から、エレクトロニクスソサイエティ運営委員会研究技術会議の副会長を矢加部先生から引き継ぎました大橋です。これまで、電子情報通信学会には様々な形で世話になってきました。少しでも、ご恩返しできるようにしたいと思っています。よろしくお祈りします。

昨年、10月にうれしいニュースが飛び込んできました。青色発光ダイオード（LED）発明のノーベル物理学賞受賞です。赤崎勇先生、天野浩先生、そして、中村修二先生の3人が、受賞されました。この受賞は、日本の光半導体技術が評価されたことであり、関連分野の一人として、とても勇気づけられました。1980年代から1990年代にかけて、青色ダイオードの開発は、学会で活発な議論をされていました。今回受賞された赤崎先生と天野先生は、大学の同じ研究グループでしたが、中村先生は企業の研究者でおられました。大学と企業の研究グループから一緒に受賞された、ということは、まさしく、学会での議論が実を結んだ例だといえます。このような、活動は、今回の受賞対象だけではなく、いろいろな成果に寄与しているはずですし、学会活動の重要性を今一度認識できる機会だったと思います。今後もこのような素晴らしい成果を生み出すためにも、学会活動の活性化に、研究技術会議の活動が貢献できるように努力をしてゆきたいと思います。

さて、研究技術会議の活動について、ご紹介させていただきます。研究技術会議では、研究専門委員会の設立・廃止の審議、国際会議の主催、共催、協賛、後援の審議、総合大会・ソサイエティ大会の運営を主要な担務としています。活動の中心は、研究専門委員会となっています。電子情報通信学会には、常設研究会と時限研究会があります。常設研究会は、各ソサイエティ・グループに所属する研究専門委員会が、それぞれ基幹分野の研究会を開催しており、

エレクトロニクスソサイエティでは、現在、15の常設研究専門委員会が存在しています。時限研究会は、自由な形式の研究会として、シンポジウム・ワークショップ・勉強会・若手向け集会等の形態で開催されています。エレクトロニクスソサイエティには、7つの、時限研究専門委員会が、設置されています。時限研究会は、名前の通り、期間を限定して設置されているものです。しかし、実体をみると、10年以上、長く設置されているものもあります。もちろん、研究内容は変化しているわけですから、必ずしも短期間である必要はないのですが、研究会というコミュニティのあり方をどのようにしていくのがよいのかという点で、すこし考えさせられます。研究専門委員会の活性化が、研究技術会議の一番のミッションですから、そのために、研究専門委員会のあり方そのものから見直す議論が行われています。エレクトロニクスソサイエティの“在り方委員会”における議論も、その根本を担っているものであります。エレクトロニクスソサイエティと一言で言っても、多岐にわたった分野であるため、一様に決まりを設けるのはそぐわないと思い、各研究専門委員会の意見を基に、議論を重ねているところです。

研究技術会議では、引き続き、これらの活動を通じて、皆様の研究活動の活性化の一端を担えれば、と思っております。ご意見などありましたら、研究技術会議（kenkyuu@es.icice.org）宛にご連絡いただくと、幸いです。今後も、皆様のご支援ご協力、よろしくお願いいたします。

著者略歴：

1985年早稲田大学卒、1987年東京工業大学修士課程修了、同年日本電信電話株式会社、基礎研究所入所、フォトンクス研究所において、光半導体デバイスの研究開発に従事。2014年からNTTエレクトロニクス 技術開発センタ次長。

研究専門委員会（第一種）

機構デバイス(EMD)	マイクロ波(MW)
磁気記録・情報ストレージ(MRIS)	集積回路(ICD)
超伝導エレクトロニクス(SCE)	有機エレクトロニクス(OME)
電子ディスプレイ(EID)	光エレクトロニクス(OPE)
電子デバイス(ED)	レーザ・量子エレクトロニクス(LQE)
電子部品・材料(CPM)	エレクトロニクスシミュレーション(EST)
電磁界理論(EMT)	マイクロ波・ミリ波フォトンクス(MWP)
シリコン材料・デバイス(SDM)	

時限研究会

集積光デバイスと応用技術時限(IPDA)
超高速光エレクトロニクス時限(UFO)
量子情報技術時限(QIT)
テラヘルツ応用システム時限(THz)
システムナノ技術時限(SNT)
ポリマー光回路時限(POC)
シリコンフォトンクス時限(SIPH)